

# 清流

題字：芳野 充

令和元年5月30日  
第29号

発行所 加来不動産(株)  
発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに  
静かに  
清流のように

あいさつで心かよわす

わが家の朝は、お互いが相手の目をみて「おはようございます」と笑顔であいさつすることからはじまります。ですが、正直にいうと眠たい目をこすりながら起きてくる子どもたちからは、「笑顔であいさつ」が返ってきているかと言われると、もう少し時間がかかりそうです。

なぜ朝のあいさつが大切なのか。それは、相手にあいさつをすることが「思いやり」の表れであり、また自分の謙虚さを押し量るものと考えられているからです。

「清流」第4号で、わたしが妻に笑顔であいさつができるようになるまでに約三年かかったとお伝えしました。雑なあいさつをしていた頃のわたしをふり返ると、「妻にあいさつする必要がない」「仕事で疲れているから仕方がない」「面倒くさい」「いまさら照れくさい」というワガママや傲慢さがよく出ていたように思います。また、その頃のわたしの家庭環境や職場環境は、お世辞にも良いとは言えませんでした。このような経験から、たかだか「あいさつ」一つで自分の心の状態があらわれ、じつはそれが自身の周辺環境にも影響することを実感しました。

また「あいさつ」をインターネットで調べていると、「あいさつできない人の心理特徴」という気になる内容を目にしました。その特徴とは、「嫌いな人にはとことんムシする正直者」「超合理主義であいさつをムダと考えている」「プライドが高く、見下している人にあいさつしない」「引っ込み思案であいさつすることに緊張する」「自信がなく嫌われていると思いついでいる」「人嫌いであいさつをわずらわしく感じている」「あいさつに対してそこまで重要性を感じない」とありました。過去のわたしを当てはめてみると、大部分の項目が当てはまります。

月刊「清流」第26号でご紹介させていただいた、「謙虚さがなくなる兆候十四項目」の三番目には「あいさつが雑になります」とあります。たかが「あいさつ」、されど「あいさつ」。短い言葉のなかにもその人の心の状態があらわれ、それが禍福にも影響するのではないのでしょうか。だとすれば、笑顔であいさつする。やわらかな口調であいさつする。そのようなあいさつで心かよわすことのできる人間になりたいと思います。

加来 寛

